

ベリーショート賞

背骨

伊豆泥男

正直に告白させてもらうと、僕には背骨がない。生まれつきなのか後天的なものなのか、今となってはもう覚えていない。少なくとも三歳の頃にはもうなかったように思う。とにかく、僕には背骨がないのである。

背骨がなくて困るのは、何よりまっすぐ前を向けられないことである。老人のように腰をくの字に曲げるか、社長のようになぞり返るかのどちらかである。老人の社長になれればいいのだが、中間の姿勢になるためには背骨が必要不可欠なのだ。

つまり僕は、人の顔を見て話ができない。いつも地面か空を見ている。今しゃべっている相手がどんな顔をし、どんな表情を向けているのか全く分からないのだ。だから僕は、ばれないように何とかごまかす。声色から、相手がどんな顔で話しているか予測する。

背骨がないことがばれてはいけない。背骨がないことがみんなに知られてもしたら、どんな目にあわされるか。だから僕は、背骨があるふりをしながら生きている。悟られてはいけない。周りの人間は皆、背骨があるのだから。

そんなある日のこと。学校で席替えがあった。半年に一度

教室の中が、数字の書かれた割り箸のくじでランダムにシャッフルされるイベントだ。教室は湧いた。無理もないことだ。これからの、十月以降の、卒業までの人間関係が、これで決まってしまうと言っても過言ではない。仲の良い友達の隣になれば薔薇色だし、いじめてくる嫌な奴の隣になればにび色だ。恋が始まる可能性だってある。小学六年生というのは、思春期よりも思春期なのだ。

僕はひたすら、後ろの席であってほしいと願っていた。理由は単純、注目されにくいからだ。後ろから背中を、半年間も見つめられれば、さすがに背骨がないことがばれてしまうかもしれない。僕は箱から飛び出ている割り箸のうち、一番短いものを掴んだ。

思いは通じ、僕は晴れて一番後ろの、しかも窓際の角の席を引き当てた。僕はついガッツポーズをした。それを見た先生は、そんなに後ろの席が嬉しかったのかと訝しんだ。僕はごまかすために、後ろから人を見るのが好きなんですと言った。

そして全員の新しい場所が決まり、席の移動が行われた。机の移動はせず、生徒が入れ替わる形だ。僕は机の中の荷物をまとめ、窓際の席へと移った。今日からしばらく、後ろからの視

線を気にせず授業を受けられる。僕の心は晴れやかだった。

教科書やノートを、机の中に入れようとする。すると、教科書が奥の方で何かに引っかかった。おや、移動の時に荷物は全て回収されたはずなのに。この席の前にいた人の忘れ物だろうか。僕は手を伸ばし、その何かを取り出した。

それは、普段授業で使っているものよりも少し小さな、A5サイズのノートだった。手帳といっても良いサイズかもしれない。名前は書いていない。いったい誰の忘れ物だろう。僕は無性に気になり、良くないことだとは思いつつも、中を覗いてみた。

——それは、日記であった。そして、その一行目に書かれていた言葉は、僕にとつては見過ぎせないものだった。

『私には、背骨がありません』

そこに綴られていたのは、背骨がない人間の苦悩であった。背骨がないから前を向けない。上か下しか見られない。だから自分には、人の顔が分からない。それがばれてはいけない。でもどこかで言わなくては、発散しなくては精神がもたない。だから自分は、このような日記を書いている——と。

僕はその文章に、心の底から共感した。共鳴したと言ってもいいかもしれない。この人は、僕と同じだ。僕と同じように背骨がなく、僕と同じ悩みを持っている。

会いたい。この日記の書き手に、会ってみたい。僕はその思いに突き動かされた。僕は放課後、職員室にいる担任の先生を

訪ねた。僕の新しい席に、以前座っていたのは誰ですかと、食ってかかるような勢いで質問した。先生は、少し戸惑いながら答えた。ああ、それなら久保さんだ。あの子もそういえば、あの席を引いた時に君と同じように喜んでいったっけな。

僕は手短かに礼を言うと、職員室を後にした。久保さん。久保さんか。教室の中でも、あまり目立たない子だったはずだ。今時珍しいおさげの三つ編みに、緑のふちの眼鏡をかけているらしい（顔は見えないのであくまで伝聞であるが）。なるほど、背骨を持たないあの日記の持ち主は彼女か。僕は彼女とどう会うかの計画を練りながら教室へ戻った。古風に下駄箱に果たし状のような呼び出しのお便りを入れておこうか。いや、それだとあらぬ誤解を呼びそうだ。そういった形式で行われるのは、たいていの場合愛の告白に他ならない。他にはどんな方法があるだろう。お互いの秘密についての話なので、出来るだけ他の人間には知られたくないのだが——ぶつぶつ脳内で会議をしながら、僕は六年二組の教室の扉を開いた。

すると、みんなが帰ったはずの教室内の窓側の隅、つまり新しい僕の席に、女子生徒が一人座って、机の中を覗いていた。腰まで伸びた、柳の枝のようにしだれた三つ編み。見間違うはずもない。あれは間違いなく、久保さんだ。

考えてみれば自然なことだ。自分の秘密をつづった日記を忘れたら、すぐに気がつくに決まっている。そしてそれを放課後、みんなが帰った後に取り戻そうとするのも、また自然な流れである。

僕はランドセルから、例の日記を取り出した。そして久保さんに声をかけ、差し出した。君が探しているのは、これだろうと。久保さんは焦り取り乱しながらも、それを受取るうとした。その瞬間僕は、日記を後ろに隠す。そしてこう言うのだった。久保さんは、背骨がないんだね。実は僕もそうなんだ。

まさか私以外にも、背骨のない人がいたなんて思わなかったわ。久保さんは驚きと興奮を交えながら言った。おそらく、顔は赤く高揚しているのだろう。僕も同じく高ぶっていた。こんなにも早く、久保さんと話したいという願いが叶うなんて。

僕たちは、うつむいたまま背骨がないことについて語りあった。とても、とても楽しい時間だった。相手の顔を想像しなくていい会話は初めてだった。彼女は、背骨がないことをどう隠しているかについて語ってくれた。基本的に、何かに座って過ごすことが秘訣だそうだ。背もたれがあるものに座っているとバレにくいらしい。彼女の語る話には、共感できるところもあり、また新たな知見もあった。

なにより素晴らしかったのが、彼女の提案であった。彼女は持つていた手鏡を、地面に置いたのだ。するとその鏡の中にお互いうつむいている僕らの顔が映し出されたのだ。初めて見た他人の顔だった。久保さんの顔には、きりりとした目元に高すぎない鼻、そしてぷつくりとした唇があった。初めて見る女性の顔なので、比較することはできないが、僕はそれを美しいと感じた。手鏡に雫が落ちた。

僕たちは、日の暮れるまで話した。放課後遅くまで学校に残っていると、教頭先生が見回りに来るということを初めて知った。僕たちは軽く叱られ、そして家へと帰った。しかし帰った後でも、興奮は覚めなかった。明日は一体何を話そうか。そう思うだけで眠れなくなった。

久保さんという理解者を得てから、一か月が経った。僕たちは毎日のように、放課後教室に残り話し込んだ。十七時半ごろに教頭先生が来るので、そのギリギリまで語り合った。背骨のないこと以外にも、他愛のないことを話した。算数のテストが分からなかったとか、体育で後転ができるようになったとか、そんなことである。それはかけがえないひと時であった。そしてその日、久保さんはある提案をした。

ねえ、私たちこれだけ仲良くなったのだから、そろそろ背骨に成れるんじゃないかしら。

背骨に、成る。それは初めて聞く表現であった。彼女は続ける。私たちはこの一か月で、深くお互いを理解したわ。だから今の私なら、あなたの背骨に成れる気がするの。

彼女は語った。背骨というのは、つまりその人間の支えなのよ。私たちは今まで、誰にも支えられず、また誰にも支えられようとせずに生きてきた。だからこんな、ぐにやぐにやの身体だったのよ。けれど今なら、これだけわかりあった今なら違う。私はあなたの骨に成れる。そう思っているの。

無茶苦茶な理論だ。しかしこの話は、思えば最初から無茶苦

茶なのだ。神経の詰まった背骨のない人間が、こうして生きて
いるというだけでも理屈が通っていない。何より彼女の言葉に
は、真に迫る説得力があった。

僕は答える。そうかもしれない。君の言うことが正しければ、
確かになれるかもしれない。しかし、どうやって背骨に成るつ
ていうんだい？

簡単よ。久保さんはおさげを揺らす。説明するのは難しいん
だけれども、それはとても簡単なことなの。ちよつと後ろを向
いて、座つてくれるかしら。

言われて僕は従う。すると彼女のひんやりした手が背中に触
れる。じゃあ今から入るね。少し変な感じがすると思うけど、
あなたなら我慢できるでしょう。

一体何が始まるというのか。戸惑う僕にお構いなしで、久保
さんは背中に飛び込んできた。心の準備をする間もなかった。

それは例えるならば、公園のアリの巣を砂場の砂で満たすよ
うな、図書館の本棚に旅行ガイドを並べるような、そんな感覚
だった。性行為と似ているのかもしれない。とにかく久保さん
は、僕の背中に入ってきた。そして僕の中で形を変えていった。
沈みゆく太陽が僕らをじっと見ていた。

そうして久保さんは、僕の背骨に成った。僕はすつくと立ち
上がった。そして前を向く。久保さんという背骨を得た僕は、
ちゃんと前が見られるようになっていた。視界が広い。彼女の
言ったことは本当だったのだ。

僕が感動に打ち震えていると、背後から怒鳴り声が飛んでき

た。こらあ、またお前たちか。早く帰れと言っておるだろう。
この声は、教頭先生だ。時計を見ると、すでに十七時半は過ぎ
ていた。いつもの見回りだ。

僕の心臓は高鳴っていた。このまま振り返れば、僕は教頭先
生に正面から顔を向けることになる。教頭先生の顔を直で見る
ことになるのだ。それは久保さんに続く、人生で二度目の経験
だ。しかも今回は、鏡に映った反転した虚像ではない人間の顔
だ。いったい教頭先生は、どんな顔をしているのだろうか。声
の感じからは、かなり高齢のイメージがあった。だとすると深
いしわが幾重にも刻まれているのだろうか。そして僕は、ワク
ワクしながら声のする方に体をひねった。

そこには、

——顔は、なかった。

僕の視界に移ったのは、うつむく教頭先生の禿げあがった頭
だけだった。教頭先生の身体は、くの字に折れ曲がっていた。
床を見つめる教頭先生の顔は、正面の僕からは見えない。僕は
ほほをひきつらせた。

教頭先生は僕の顔を見ず、しかし僕の顔が見えているかのよ
うに言った。ほうれ、早く帰りなさい。そろそろ日が沈む。闇
の中は危ないのだから、と。

僕は思わずその場から逃げ出した。ランドセルすら置き去り
にして。そんなはずはない。そんなはずはない。もしもそうだつ
たとしたら、この世界の全てが嘘になる。だから、そんなはず

はないのだ。たまたま教頭先生が高齢で、腰が曲がっているというだけだ。きつとそうに違いない。

しかし僕のすぎるような思いは、いとも簡単に打ち砕かれた。一学校を飛び出した僕の前に広がっていたのは、今までの僕の価値観では、考えられない世界であった。町を歩く人々は皆、僕や久保さんと同じであった。ネギの飛び出したビニール袋を片手に、のけぞり空を見上げ道を歩く主婦。ベンチで文庫本を読みながら、猫以上に体を丸めるスーツの男。みんなみんな、背骨がないとは思えない姿勢をしていた。みんなみんな、顔が見えなかった。

一体世界はどうなつてしまつたんだ。うろたえながらも僕は、見覚えのある足元を見つめる。あの靴は、僕たちの担任の先生だ。先生は弓のように体をしならせ、虚空を見つめ商店街を駅の方へ歩いていった。

「僕は藁にもすがる思いで先生に駆け寄つた。そして問うた——先生には僕が見えていますか。僕の顔が、見えていますか。先生は、一瞬硬直した。

その硬直がすべてを物語つていた。取り繕うようにすぐさま、もちろん見えているなどといったが、もはや信じられなかった。ああ、この人も僕の顔を見ていない。見ることができないのだ。これではつきりした。真実が浮き彫りになつてしまつた。この世にはそもそも、背骨なんてものはありはしなかつたのだ。僕たちが信じていたのは、ただの幻想だつたのだ。みんなでありもしないものを、あるように演じ振舞つていただけなのだ。

背骨がなかつたのは、僕と久保さんだけではなかつたのだ。

全てを理解した僕を、暴力的な吐き気が襲つた。それは胃や腸から来るものではなかつた。受け入れられないものを、存在しないはずのものを、身体が拒絶している。そんな吐き気だ。明瞭だつたはずの視界がぐるぐる回る。

僕は挨拶もせずに先生の前から立ち去り、商店街の店と店の狭間に身を隠した。そして口の中に手を突っ込み、思いっきり嘔吐した。体の中の根っこが引き抜かれるような思いだつた。

体外に排出されたのは、吐瀉物ではなかつた。それは十二の骨だつた。その形は、僕たちが抱いていた背骨のイメージそのものであつた。昨日までの僕ならば、それを背骨と言えただろうが、今の僕には口が裂けても言えない

十二の背骨もどきは一つに集まり、溶け合い混ざり合い膨らんだ。そして長い三つ編みのおさげを生やし、緑のふちの眼鏡をかけた。僕の背中にいた久保さんは、再び元の姿へと戻つた。それと同時に、僕は前を向けなくなつた。

はてな。いったいどうして背骨に成れなくなつてしまつたのかしら。久保さんは心底不思議そうに言つた。私はこのまま、一生あなたの背骨でいるつもりだつたのに。

僕は思わず声を荒らげた。あんなのが背骨だつて、冗談じゃない。あんなのは背骨なんかじゃない。いや、そもそも背骨なんてものは——。と、言いかけたところで、カラスが路地裏に汚い声を響かせた。僕の言葉はかき消された。

久保さんは、言葉の続きを聞くようなことはしなかつた。今

日はとつても楽しかったわ。また明日も一緒に遊びましょと、可愛くおさげを揺らしていた。

僕は何も言わずに、路地裏を後にした。すべてが信じられなくなっていた。梯子が外された気分だった。これまでの自分は、一体何だったのだろう。湯船に浸かってもベッドに入っても、何も答えは出なかった。

それ以降僕は、卒業するまでの間、一度も学校へ行かなかつた。あの日起こった出来事の全てから目をそらすために。しかし僕は今でも、それがいけないことだったとは思っていない。人は皆、何かから目をそらしながら生きている。僕の場合はそれが、久保さんと彼女にまつわる事件だったというだけのことなのだから。